

青谷上寺地遺跡の変遷 (五)

弥生時代後期末～古墳時代前期初頭および古墳時代以降 (約一八〇〇年前)

前段階の遺跡の中心部と周辺低湿地を区画する矢板を打ち込んだ溝は、弥生時代後期後葉から徐々に埋まっています。大量の人骨が発見されたのも、溝が埋まるこの時期に当たります。

弥生から時を超えて

青谷上寺地遺跡

弥生時代後期末には、中心部周囲の溝は、区画という役割を終えたようです。埋まった溝の部分には、一部に杭列が打ち込まれ、杭による区画に変化した可能性もあります。

この弥生時代後期末から古墳時代前期初頭までは、土器の数や遺構の広がりを見るかぎり、集落が縮小したとはいえませんが、遺構

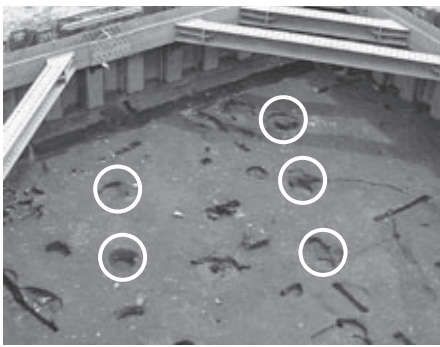
のあり方に変化が認められます。

遺跡中心部には、掘立柱建物跡や不整形な土坑などが確認され、埋まった溝の付近まで広がります。

また、遺跡周辺の低地では依然として水田を作り続けています。

古墳時代前期以降になると、遺跡中心部の遺構は少数の建物跡や井戸跡のみで、遺物の数も減少してきます。

しかし、周辺で祭祀に用いられた形代が出土したり、周辺の丘陵で多数の古墳が築かれることなどから、この地域で古墳時代以降も人々の営みが続いていたと考えられます。



古墳時代の掘立柱建物跡 (○印は柱の位置)

因幡万葉 夢幻譚

現代から万葉の世界へ旅をする私こと「万葉の旅人」が同伴家持と語り合う夢物語

巻六 山菜とりの少女にプロポーズ

四月、山には花が咲きにおい、滝の上の蕨も萌え出づる。因幡の山の雪は、南風に乗って融け、因幡の川も水かさが増してきた。「手折った山桜を大きな瓶に挿して、花見の宴の準備ですか」と私が問えば、「明日はわが館にて、皆で桜の花を挿頭や纏にして宴をするのだ。都では、春日にある三笠山に月が出る頃、佐紀山の夜桜をよく楽しんでるのだ」と家持さんは弾んで言う。「日本人はやはり桜ですね」と私が言えば、「梅は外来の花で、桜こそが日本固有の花だ。元々、花見は桜の花の咲き具合を見て稲の実りを占い、稲の神を迎える行事なのだ」と家持さんは国守らしく、一年の実りを心配しているのである。

嫁菜(うはぎ)を摘んで、煮ているのでしよう」と私が言えば「昔、雄略天皇が国見をされた時、若菜を摘む少女に、家や名を教えるとプロポーズされた歌がある」と家持さんが教えてくれた。

私は興味を覚えて「名前を教えたかどうかになるのでしよう」と聞いてみた。「結婚を承諾したことになる。本当の名前は母親しか知らぬものなのだ」と家持さんが答えるので、「うっかり女性が名前を教えたなら、えらいことになるのですね」と私は驚いたのだ。続く…。

万葉ひとと若菜摘み行事 冬ごもりの大地を割って芽を張る若菜に生命の復活をみて、その若菜にこもるおう盛な生命力を摂取し、新しい年の健康を願う行事。正月の七草かゆに伝承されている。

万葉クイズ

(先月の問題) 当時中国で流行した化粧法とは？

(解答) 落梅粧(らくばいじょう)

(今月の問題) 文中の挿頭は、現在の何のこと？

答えは6月1日です。

お詫言と訂正

とっとり市報3月15日号の16ページ『万葉の里通信』の中で、「午前1時30分」とあるのは「午後1時30分」の誤りでした。



吉野の山桜 写真 川本武司

(文) 因幡万葉歴史館主任学芸員 中山和之



©鈴木靖将